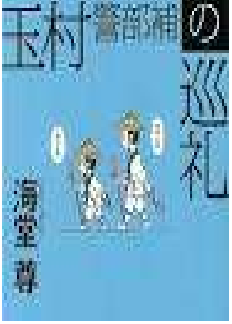


後期の図書委員さんによるお勧め本の紹介です。図書室に来て是非読んで下さい。夏休みに読んだ本の感想文を応募していましたが、2年1組 中安勇翔君の「生きる知恵」が佳作に選ばれました。中安君は昨年に続き、2度目の受賞となりました。おめでとうございます。 期限を超えて本を借りている人は、一度返却してください。年末の整理がありますので、よろしくお願いします。

☆		「大人の言葉選びが身につく本」 吉田裕子 この本はタイトル通り、たくさんの言葉が載っています。その中には、皆さんが知っている言葉から、難しい言葉まであります。大人でも使わないような言葉も出てきます。たくさんの言葉を知って、勉強にもなりますし、イラストもあり面白いので是非読んでみて下さい。例えば、「竹馬の友」とは何のことでしょうか？ 3-3 F君
		「弱虫ペダル」 渡辺 航 お金を節約するために、千葉から秋葉原まで自転車で通うアニメ好きの高校生、小野田坂道。彼は、あることをきっかけに自転車競技部に入る。坂道は、自転車選手としての秘められた才能を発揮し、仲間のため、そして自分の限界を超えるため、レースに挑んでいく。 2-2 N君
☆		「同志少女よ 敵を撃て」 逢坂冬馬 この本の主人公はソ連のイワノフスカヤ村というところで生まれたセラフィマという少女です。ドイツ軍に村を襲われて、村民は皆殺しにされます。そして、セラフィマの母もイエーガーという狙撃手に打たれて死にました。そこで、セラフィマも死を覚悟しましたが、イリーナという女性兵士に助けられます。そしてイリーナはセラフィマに「戦いたいのか、死にたいのか？」と問います。悲しんでいたセラフィマは母を殺したイエーガーを殺して、イリーナも殺すと心に決めました。そうして、女性狙撃手となる選択をしたのです。 2-2 T君
☆		「君、星のごとく」 風良ゆう これは小さな島で育った「かい」と私「あきみ」の話です。かいの母親は男にだらしなくて、いつも騙されています。私の母は家を出て行って別の女性と暮らす夫をずっと待っています。二人の家庭は幸せではありません。二人が自然に付き合うようになり、かいは高校を卒業すると漫画家になるために東京へ出ます。遠距離恋愛は続いていました。私は美しい刺繍の世界に魅せられて、趣味で作ったものを売るようになります。営業補助の仕事もしていますが、女性蔑視を感じています。かいの漫画は上京後4年で売れ出しました。ちやほやされて、お金も入りだします。かいのアシスタントの直人君はゲイでした。高校生の圭君と卒業旅行に行った直人君に道徳的責任を問われます。人生の浮き沈み、人の心のつながり、生きていくために必要な知恵、思う通りに生きることができるようになった二人を待ち受けていたのは。 図書部

☆		「ひとり旅日和 縁結び！」 秋川滝美 日和は同級生で憧れの人、蓮人の旅のサイトを参考に、一人旅をするようになった。北海道、函館から、大阪、出雲など、その土地のおいしいものを食べて、地酒を飲む。お城やパワースポットを巡るというのもあるが、今回の旅は、職場の先輩のれいかの結婚式の受付を頼まれて出かけた姫路。 結婚式に、一日早く到着する。まず出かける先は、姫路城。同じく受付を頼まれていた蓮人も同日に姫路入り。二人が行きたかったお店が偶然かぶったりして、楽しい時をすごす。最初は明石焼き。そして、駅そば。最後はひねぼんと姫路おでん。楽しそうな旅の様子に、どこかに一人旅をしようかなという気持ちにさせられる本です。 図書部
☆		「玉村警部補の巡礼」 海堂尊 かわいらしい表紙に、ひょうきんなかんじの玉村警部補が重なる。二人はお遍路に出かけながら、行く先には事件が待っている。遍路宿で知り合いになった外国人の若い女性キャサリンが拉致される事件は二人の機転により緊急配備であつという間にワゴン車が見つかり、事件を解決した。また次には遍路宿の主人が岩室に一晚こもり、朝には死体で発見される事件が起こる。CT で見たところは異常がないが、解剖が必要だとの見立てで、解剖すると、体中の血液が抜かれていた。この難解な事件を加納警視正が解決していく。二人が歩き遍路する途上にはいつも事件が待っている。 図書部
☆		「大家さんと僕」 矢部太郎 ほっこりかわいい本。昭和生まれの大家さんが、冬至になると、下宿人の僕のドアにゆず入りの袋をひっかけておいてくれる。年末には仕事をキャンセルしてでも、大家さんとゆっくり紅白歌合戦を見る。大家さんとの不思議な時間をたくさん共有するうちに、大家さんのファンになっていた僕。大家さんが入院すると、心配で、お見舞いに行く。何をもっていけば喜ばれるのかさっぱりわからない。伊勢丹で買った食べ物なら間違いないということに後々気づくが、モズクを持ってお見舞いに。かわいい漫画にほっこりして下さい。 図書部
☆		「言葉の園のお菓子番 見えない花」 ほしおさなえ 一葉は亡くなった祖母が通っていた連句の会に参加する。祖母のメモにある季節の和菓子を携えて。発句に続けて三人がつけていく連句。四句目に軽くつける楽しさを知る。人の縁を通して、一葉にパン屋さんからのポップ依頼が入る。暖かい人たちとの出会いにほのぼのとした気持ちになれる本です。 夏木立光の玉がゆれてをり ピアノの音の響くベランダ 永遠のような数式書いていて 古い線路の先を見つめる 山あいのパン屋の酵母起こす月 図書部